

## スペインにおけるピカソ批評 — 歪められた画家のイメージ —

マドリード・コンプルテンセ大学 松田 健児

---

ピカソと祖国スペインの関係については初期バルセロナでの修行時代や代表作《ゲルニカ》の制作背景を中心に膨大な数の研究が行われてきた。しかし、スペイン内戦（1936-39年）以降、フランコ体制期の両者の関係に関しては十分な研究がなされていないのが現状である。20年以上前にコンバリア・デセウスによって指摘された、「フランコ体制下スペインにおけるピカソのイメージ — 「赤」という批判から政府側によるピカソを取り戻そうという目論見に到る — に関する専門研究はこれからはなされなければならない」という問題は未だ手付かずの状態のまま残っている。

本発表では、しかしながら、研究の焦点を内戦以前のスペインに置き、ピカソを否定する論説がどのように展開していったのかを検討する。ファシズム独裁のフランコ体制下でピカソに代表される前衛芸術が非難的になったというのは想像に難くない。しかし、従来紋切り型のように繰り返されてきたように、スペインの前衛芸術が内戦で決定的に断絶したわけではなかったことは1999年マドリードで行われた「過渡期、内戦前後のスペイン人画家たち」展において示された。ハイメ・ブリウエガ博士が主張するとおり、「あるときは内戦前後の両時期をつなぐ基本的な繋がりが無視され、歴史記述や美学的判断がイデオロギー的なものと錯綜し、両時期を巡る非難や祝福を繰り返して」きたことを反省し、「内戦前後のスペインの芸術創造が体験した驚くべき連続性」が明らかにされてきているのが現状なのだしたら、フランコ体制下で展開されたピカソ否定論も内戦以前にその根源を辿ることができるのではないかという問題設定も必要となってくる。

実際、フランコ体制以前のスペインでピカソがどう評価されたのかを辿っていくと興味深い現象が垣間見えてくる。まず、ピカソを賛美する批評家たちがいるにしても特定の様式のみを称揚し、それ以外の部分を見捨てるという偏った傾向に陥っていたり、国内で積極的に前衛運動を展開し、ピカソをスペイン内で紹介する役割を担った前衛雑誌の立役者がフランコ体制の美学を打ち立てた功労者となったりと、ピカソ擁護論とピカソ否定論の二項対立では到底割り切れないのである。

また、ユダヤのイメージと結び付けられるに到った当時のピカソ否定論を例にとってみれば、国内と国外で同じような論理が適用されることがあるにしても国外の評価がスペインにそのまま流入してきたという単純な構図ではなく、それが特定の歴史的な脈に当てはめられ、違う意味を与えられるようになっている。

いわゆる「周辺」地域でありながら前衛芸術の代表的芸術家を幾人も輩出したスペインで、ピカソ芸術に代表される前衛芸術の輸入がどのような摩擦を引き起こし、どのような歪曲を被ったのかを跡付け、ピカソに対する否定的な評価が公認のイデオロギーとして定着してしまう逆転現象の経緯を明らかにしたい。